

明
月
シ
里

omaera doredake
 orenokoto suki dattandayo!

OMA-DORE!

お前ら
どれだけ俺のこと
好き!
だったんだよ!

試読版 乃愛編

第六節 櫛水乃愛は恋煩いをする

『バイトがない日にこんなことを頼んで悪いんだが、うちの娘を見舞いに来てくれないか？』

ある日のこと——厳密に言えれば、りゅうと隆人りゅうとが生徒会長から

フられて第二天文部へと入部した翌週の水曜。

隆人りゅうとが半年前から週三で働いているバイト先の喫茶店きっさてん、『キヤットオブナインテイル』のマスターから、そんなラインメッセージが唐突とうとつに入ってきた。

娘とは、隆人の同級生である、櫛水くしみず乃愛のあのことと言つ

ているのだろう。

プログラマーの天才少女で、病的なまでの人見知り。
協調性ゼロの擬人化。

無口で虚弱なくせに、主張が強く、唯我獨尊のスタイルを貫いている変人である。

厳密に言えば、自分勝手とはちよつと違う。

自分のルールを曲げず人に押しつけてくるだけで
——やつぱり、自分勝手かもしれない。

隆人とはバイト先の娘という奇妙な縁もあり、クラスメイトという点もあり、ちよくちよく関わり合いがある少女である。

入学から半年後の出会いと、とある出来事。

学園内に捨てられたいた猫^{ねこ}の飼い主を探した件で協力したことにより、人見知りな彼女にも顔は覚えてもらえた。

その後、彼女の父が経営する喫茶店でバイトの面接に受かり、客の応対をしないという彼女の不足を補うとう、なんとも奇妙な友人（？）関係を築いてきた。

しかし——未だ彼女の本心をつかめていないという点に関しては、隆人も他のクラスメイトと同じだろうと思う。

ただひとつ——乃愛は自分本位な少女であるが、悪いヤツではない。

対人の交渉が死ぬほど苦手なくせに、わざわざ特設サ

イトを作つてまで、猫の飼い主を捜してやつたのを見て、
隆人は確信した。

マスターからは、なんとか乃愛が周囲に打ち解けられる
ようにしてほしいとお願いされ、それを乃愛に伝えた
ところ——。

『死ぬほど余計なお世話だから、しなくていい』

即座にジト目で睨にらまれてしまつた。

『そんなことしたら、隆人の携帯にウイルスを送つて恥
ずかしいエロサイトの閲覧履歴りれきを全校生徒の携帯に拡散
するから』

『やめてくださいお願いします。僕が悪かつたです』
気遣いがバレた直後、メールでそんなやりとりをした

覚えがある。

（というか何故、俺^{なぜ}^{おれ}が携帯でエロサイトを見ているという前提で話をするツ!？）

激しく異を唱えたかつたが、その後の返答が恐ろしいのでやめた。

それはさておき、乃愛の身勝手な生き方に関しては呆^{あき}れる反面、隆人は羨^{うらや}ましいと思うこともあるのだ。

クラス内で唯一、教室に『枕^{まくら}』を持参しており、休み時間は全力で寝ている。

昼休みも……寝ている。

授業中も……眞面目に聞いているフリをしつつ、目を開けたまま半分寝ている。

おそらくだが、電車でも立つたまま寝られるに違いない。

いつか一度実験してみたいと隆人は思っている。

なお、乃愛が他の生徒と会話したところを、ひと月の間でたつた一度しか隆人は見たことがない。

それも、一言一言で終わるレベルの素つ^{そつけ}気ない内容である。

女子の連れトイレに行かないとか、ぼつち飯ぼつちめしだとかいう次元ではない。

もはや人間関係の拒絶どころか、同じ世界線に存在しているかも怪しいものである。

そんな乃愛が病気で倒れたというのは、若干心配でも

じゃつかん

あつた。

もとより体も強い方ではないようだが、それでも負けず嫌いでしぶとくやつてくるのが乃愛という少女なので、一週間も休んでいるのは気になつていた。

「見舞いになにを買つていいくか。妙な下心を出すと嫌われそうだしな、アイツの場合」

ちなみに、『オシャレ』とか、『インスタ映え』とかいう一般的な女子の感性とは無縁な乃愛だが、あれで容姿は結構——いや、かなり可愛いのである。

ノーメイクだがきちつと制服を着込んでいるだけで、既に美少女なのだ。

なお、友人すらない有様なので、白雪以上に浮いた

話はない。

そんな乃愛だが、隆人も全くの他人ではない以上、今回は会いに行つてもいいと思つた。

お見舞いの品といえば花か果物くだものだろうが、乃愛が相手の場合は『センスがない』とか『部屋の邪魔』だとか言われそうな気がしてならない。

「いや——俺にそれだけ言うくらいの元氣があれば、よかつたことにするか」

変人で、かろうじて友人と呼べるくらいの関係で、半分以上は話も通じないが——これで結構、乃愛のことは好きなのである。

そんな自分もまた、かなりの変わり者だと思いながら

——病人でも食べやすそうなものを選んで差し入れてやることにした。



放課後から十数分後。

隆人は制服姿のままバイト先の力フ工に到着する。

二階建ての広めの一軒家で、一階は喫茶店。二階は物

置兼マスターの部屋らしい。

それでは乃愛の部屋はどうかといふと——地下室である。

し、乃愛の部屋の合い鍵を渡される。

「いや、よく来てくれた。嬉しいよ芦宮君。^{あしみや}乃愛の病状

はまるでわからんが、ゆつくりしてくれたまえ」

「いいんですか？ よそ者の男に合い鍵を渡して」

ひげの似合う紳士的なおじさんで、俺は信頼を寄せて
いるが、人が良過ぎて不安になることがたまにある。

ちなみにコーヒーの味はなかなかだが、根本的に商売
下手^{べた}なのか、採算ギリギリでやつていていると聞いた。
乃愛^{もう}が中学生時代に作つたアプリやソフトで稼ぎ、たい
そう儲けたおかげで金には困つていないうちだが——な
んとも複雑な家庭事情である。

ちなみに全部マスターから聞いた話だが、バイト如き^{ごと}

に情報漏らし過ぎだと思う。

「つていうか、まだわからないんですか？ 病院にはもう行つたんですね？」

「昔から医者嫌いな子だが、部屋の前で土下座し続けて行つてもらつたよ。ははは」

マスターは苦笑しながらとんでもないことを言う。

（完全に、立場が逆転している……！）

そんな乃愛にウエイトレスをやらせたこと自体、ある意味奇跡的なのではなかろうか。

本人はものすごくやる気がないが。

「いろいろ検査をしたんだがね。わからなかつた。先週からみるみるうちに元気がなくなつてしまつてね。悪い

が、相手をしてやってくれると嬉しいよ。あの子は、君だけには心を開いてるようだから

「あんまり期待しないでください。善処はしますけど」
内心、『うつそだろ』と突つ込みたかつた隆人だが、
素直に頷いておく。

その後、プリント数枚を持って、カウンター裏の秘密の入り口を探る。

なるべく静かに地下への階段を降りると、扉の前でノックした。

「——乃愛、起きてるか？　死んでないだろうな」

「……」

返事はない。某RPGであれば死体と判断されてもや

むなしな状況であるが、隆人はめげずにラインでメッセージを送った。

『ピザをお届けにまいりました。ついでに学校のプリントも』

『ギャグセンスがマイナス二百点。眠い。置いて帰れ』

「くわあ……」

人の心を容赦なくえぐつてくる。

大半の人間はこれでショックを受けて去つて行くが、乃愛と対話しようと思つたら、この程度でめげてはいけない。

乃愛は言うなれば、気紛きまぐれな猫の性格を三回転ひねつたような存在である。

とまあ、普通ならばこんな可愛くないヤツは知らん！と思うところだが、この点も乃愛らしい、あまり人に弱味を見せたくないという強がりであることを隆人は知つていた。

というわけで、最初から考えた作戦に出た。

『お土産みやげのアイスも置いていいか？ 入り口に置いておくとびちよびちよになつて、扉越しにお前の部屋に染み込んでいくぞいいのかあ？』

こういう挑発をしてやるのである。

ちなみにメールを打つときは、不敵な笑いを浮かべながらやるのがコツである。

『さつさと、持つて帰れ』

『嫌ですー。部屋に入ってくれないと置いていきますー』

このメールを打つたあと、返信がやむ。

が、これは乃愛が無視を決め込んだわけではない。隆人が扉に耳をあてると、もぞもぞと衣擦きぬずれの音がする。

そこから察するに、人と会うための最低限の体裁を整えようとしているのだろう。

つまり、隆人を迎える気になつたということなのだ。

『冷蔵庫に入れて、とつとと置いていけ』

力チツと力ギが内側からひねられる音がして、許可が

下りる。

「おじやましまーす。うわつ!」

ドアを開けると、足下に空のペットボトルがトラップとして仕掛けたが、なんとか回避する。

「……ちつ、かわしたか」

ベッドの上で腰を下ろしたまま、小さく舌打ちする音が聞こえた。

どうやら先ほどの準備時間は、これを仕掛けていたらしい。なんてヤツだ。

パジャマを着た濃紺の黒髪少女——乃愛が、bを横に倒したような半日を向けてきた。

相変わらずの、虚無的で氣怠げな抑揚のない声である

が、主張は大きい。

地下室の中には七色に光るLEDのライトと、無数のPCの廃熱ファンが回る音が聞こえてくる。

地下室の秘密研究所のよくな生活感のない空間には、様々なモノが転がつていた。

「あのな。これが見舞客に対する仕打ちか？　お前は山で遭難したら救急隊に対し罠わなを張つておくのか……？」

開口一番突つ込むが、乃愛はにべもない。

少し妙だと隆人は思う。

病やまいで伏せつて一週間ほどもするというのに、ここまで

やる元気が残つていたというのだろうか？

（そもそも、そういうことすらめんどくさいと思つだろ

うに)

ただ——食欲がなくなりふらついているのは事実の
ようだ。

「ところで、あんまり飯食つてないんだろ？ これでも
食つておけ」

と、プリンやアイスなど、食べやすくてカロリーの多
いモノを差し出すが。

「いらない。食欲ないし」

乃愛が素つ気なく呟いたその瞬間、キユルルル、と。
腹の虫が主に叛逆^{はんぎやく}の意を示す。

「……」

次の瞬間、乃愛はかすかに頬^{ほお}を染めつつ、ジト目で言

い切つた。

「今の聞いてたら、ころす」

「純粹な殺害予告をするんじゃねえ！」そこは『誰かに言つたら』とか、『今すぐ忘れないと』とか、前提をつける！

聞いたらおしまいとか、呪いの言葉にもほどがある。いや、腹の音だつたが。

「やつぱり聞いてたな？ ころす」

「今の裏付けを取られていた!?」

さつきのセリフに『なんのこと？』って返すのが正解だつたのかよ!? わかるかそんなの！

脳内で叫びつつ、隆人は乃愛の氣力が多少は戻つてき

たことを実感した。

「だいたい殺すつてな。今のフラフラのお前にやられはしないぞ？」

「大丈夫。隆人の恥ずかしいコラ画像を、永久にネットに拡散して社会的に殺すから」

「やめろ！ そつちの方がむしろ嫌だ！ あと犯罪な！」

眞面目にできるくらいの能力はあるから困る。
才能の無駄遣いもいいところだ。

「そしたら、できたばかりの彼女にも、フラれたりして」

にやつ、と。虚無的な乃愛にしては珍しい粘着質な笑

みを見せる。

（まさかコイツ——、俺に彼女ができたことを根に持つていたのか？）

隆人は前回のバイト時に軽くその件を伝えたが、そのときは『あつそう？ ノロケ話を聞かせたらこうすよ』くらいの適当さだつた気がする。

というか、基本的に他者の事柄に関して無関心な少女なので、わかりづらい。

しかしその反面、隆人が既にフラれたという件も言いやすかつた。

「悪いが乃愛、今の俺にその攻撃は効かないぞ」

「……？」

無表情のまま首を傾げるパジャマ姿の少女に、隆人は
むしろ開き直つて教えてやることにした。



隆人が見舞いにやつてくる数時間前、櫛水乃愛は死に
かけていた。

乃愛の記憶上、これまでの人生において『風邪かぜを引い
たこと』多數、『インフルエンザ』三回、『ノロウイル
ス』一回、『骨折』一回。

——と、そのようなカルテを自分のメモ帳につけて
いた。

因果関係をなるべく突き止め、体調を崩さぬよう心がけていたのだ。

三行日記という記録を毎日つけ、安定したパフォーマンスを発揮できるよう努力している。

それもこれも——自分の才能によるプログラムの作業に没頭し、己の生き方を貫くためである。

他者から見るとやる気なさげに生きていると思われがちな乃愛だが、実際はかなり真剣に己の人生と向き合っているのだ。

対人アレルギーともスキゾイドとも思われる自分は、人になるべくかかわらず、自立した将来を生きるための努力は欠かさない。

「なんという失態^{しつたい}。このわたしが病氣の原因すらつかめないとは……」

しかし、齢^{よわい}十六歳にして、乃愛は謎の奇病にかかつた。三行日記にも、別段おかしなことが起きた兆候^{フラグ}は残つていなかつた。

ただ、無氣力になり、何事にもやる気が湧いてこない。胸の中心に鈍い痛みが走り、昼夜問わ^{けつけじよ}ず苦しんだ。睡眠不足、食欲不振、集中力の欠如。

それでも意地で学校には通おうとしたが——とある日を境に全身から力が抜け、立ち上がることすらできなくなつてしまつたのだ。

「これはきっと、世にも珍しい奇病に違いない……」

た。

厳密に言えばストレス性の精神疾患しつかんが近いといえたが、心労に心当たりはなかつたのでその可能性は捨てた。

ある晩——、乃愛は夢を見た。

たまに見る同じ悪夢ではなく、学園のワンシーンの記憶だ。

一年生の二学期——校舎の裏でこつそりと、捨て猫に餌付けしようとしている女子生徒の先輩せんぱいがいた。

一見すると微笑ましい行為に思えるが——結局のところ、敷地内に居着けば邪魔になり、最終的には保健所行きにされてしまう。

だから、後のことを考えずに餌付けするのはやめると、
その場で乃愛は文句を言つた。

しかし女生徒たちはやめなかつたので、最終的に乃愛
は里親を募集して引き取つてもらつたわけだが——彼
女たちが怒り絡からんできただとこころを、隆人が割つて入つて
くれたという経緯があつた。

『ただのチヤラいエロ男かと思つたら、意外と根性ある。
見直した』

『あのな……』

そんな感じで知り合い——後日、バイトを募集して
いる父の喫茶店のチラシを渡した。
ろくに他人を認識できない乃愛だつたが、初めてクラ

スメイトの名を覚えることができた。

それ以来、父は乃愛に同年代の友人ができたことをいたく感激し、隆人の時給を上げようしたり、まかないを出したたり、乃愛を店員として喫茶店に引きずり出そうとしたりいろいろし始めた。

そういう関係を、過ごしてきた。

そして最近、謎の病気につかつたわけだが、今さつき隆人が見舞いに来てくれるというメッセージが送られてから、何故か症状が悪化したような気がした。

なので『来るな』、『帰れ』と言つたのだが――。

「あれ……？」

たつた今、見舞いにきた隆人から、生徒会長と別れた話を聞いた直後、乃愛は自分の体が軽くなっていることに気づく。

「なんか、元気出てきたかも」
理由はわからなかつた。

しかし、長い間苦しみの中にいた乃愛にとつて、それは差し込んだ光のようだつた。

「人の不幸話を聞いて元気出すとか……。お前、嫌われるぞ……？」

「別に、嫌えばいい。わたしほんなにも気にしない」
乃愛にとつて、そのセリフは強がりではない。
幼いときからそういう信念の元に生きてきただけであ

る。

「それ置いといて、ありがと。遠慮なくもらう」と、隆人が持ってきたアイスやプリンをつかみ、もくもくと食べ始める。

ついさっきまで味覚も失われていたが、今は一際鮮やかに甘みが感じられた。

「隆人の失恋話を聞きながら食べるスイーツは、おいしい

「お前の初めての笑顔をこのタイミングで見ることになるのかよ！ もつと感動的な場面だろ普通！」

「上からお茶もつてきて。わたし、ホットカフエオレ」「聞いてねえし。人の話……！」

呆れつつも、隆人は立ち上がりつて地上一階へ向かう。なんだかんだいって、病人や怪我人に優しいところがあるものである。

立ち直つた乃愛は、その間にパジャマから部屋着へ着替えようとして、思い留まつた。

（ちよつと待て。なにを考えてるの？　わたし）

それは、ちよつとした違和感だつた。

男女どころか、自分以外の他者すらろくに認識しなかつた乃愛の人生において、はつきりとは言語化できない感情だ。

「……？」

部屋の隅には、いつぞや父親が置いてくれた着替えが

仕舞われもせず畳まれて置いてある。

目立たないようだが、下着もまとめてなので、ちよつとみつともない。

「みつともないから着替えたい。そういうことだよね、きっと」

現実の事象に 対して無頓着むとんちやくだと思われがちな乃愛だが、清潔感のある、乱れのない身だしなみにはこだわっている。

眞面目しようにぶとかいうわけでなく、決めたら己のルールを守るのが乃愛の性分である。

先ほどまでは起き上がるのも億劫おつかうだつたので仕方なかつたが、元気が湧いてきた今ならば、人と会う際に身支

度くらい整えるのが、自立した学生というもののだろう。
しかも、パジャマを脱ぐと、寝汗で下着が透けかけて
いる。

が、それより先に机の上に置いてある鏡かがみを手に取り、
寝癖ねぐせを直そうとして、はつと気づいた。

「……なにしてるの、わたし？」

なにかがおかしい。と、乃愛は思う。

普段の自分がしていないことを、無意識のうちにしよ
うとしている。

そのとき、つけっぱなしにしていたＰＣモニタに映つ
ていたネットニュースの恋愛れんあいの項目に、ある単語が書か
れているのが目についた。

『恋愛問題』のコーナーにある、「恋煩い」という――
その項目の単語を目にしたとたん、乃愛はぴたりと固ま
つた。

真顔まがおのまま、目を丸くして数秒後。

ちりちりと顔が焼け付くように熱さを帯び、白い煙が
上がつていく感覚に気づいた。

「おーい。ホットカフエオレ持つてきてやつたぞ」

「ッ：：!?」

ガチヤリと地下室のドアが開いて、隆人が顔を出す。
その瞬間、先ほどから感じていた、乃愛の奇妙な感覚
が爆発した。

「——あ」



と、両手にマスターからもらつた飲み物のカップを持っていた隆人が気づいたときには遅かつた。

隆人は状況をひと目で理解。立ち直つた乃愛が、なんらかの要因でパジャマから私服に着替えようとした。

そこで、折悪しく戻ってきた隆人と鉢合わせてしまつた。

状況を事細かに説明するなら、ただそれだけのことだが——ノックを忘れてしまつたのは、隆人の過失である。



問題は、既に事故は起きてしまつたということである。飾り気のない黒の下着に包まれた白い肌が、脱ぎかけのパジヤマ越しにしつかりと見えている。

いかに異性への意識が薄い乃愛であつても、これはシヨツクに違いない。

隆人は驚きながらも、冷静に——しつかりとその姿を目に焼きつけつつ対策を講じる。

ここでのリアクションが、後々のダメージに反映されるのだ。

この難問に対し、とつさに隆人の脳内に思い浮かんだ選択肢は三つ。

①なにも見てない振りをして、ぐく自然に振る舞う。

↓ ある意味失礼だと怒られそう。

② 下着姿をさわやかに褒める。 ↓ 上から目線な
上にキモいと怒られそう。

③ ごめんと言つて素直に謝る ↓ それで許される
つもりかと怒られそう。

（つて、全滅じゃねえか——）

セルフ突つ込みをしつつ、内心乃愛がどんなリアクシ
ヨンを取るか考えながら、最悪の事態を想定して両手の
カップふたつを床に置いた、そのとき——。

「で……」

「出でけ————————————————————————————

「で？」

A. 怒られた。

「すみませんでしたっ！」

慌てて言われた通りにして、隆人は地上一階の喫茶店に戻る。

まあ、そうなるだろうな……。と、思いつつ、乃愛に元気が出たのはいいことだと、前向きに考えることにした。

（しかし、体が貧相ひんそうでも、エロく見えるもんだな。肌、白いし……火照ほてつてるし）

などと言つたら、刺されそうなので言わない。書き置きだけ残して、ここは退散するのが正解といえ

よう。

「今度会つたら、ひとまず体調を気遣つておくか……」
結局、乃愛の病状がわからなかつたが、それだけは伝
えておいた方がいいだろう。

帰宅後。乃愛から隆人のところにきたメールには、
『お見舞いのお札は言う。ありがと』と書かれており、
隆人はホッとした。

『よかつた。お大事にな』と、返信の文を打ち、送ろう
としたところで、追加のメッセージが届いた。

『それはそれとして、ころす』

「……」

返信のメールは、その後結局送ることはできなかつた。なにも見なかつたことにしよう。

「試読版 乃愛編」は今まで。続編は3月15日発売の本編でお楽しみください。

※試読版に調整を加えていますので、本編とは異なる点がござります。あらかじめご了承ください。